

学生の授業評価からみた中期目標・中期計画

宮下 憲

人間総合科学研究科教授 体育センター

はじめに

体育センターは、体育施設管理、正課体育指導、課外スポーツ活動指導、公開講座開催、本学職員のレク活動指導等、多様な機能を有するゆえに常置委員会を設け活動している。そのなかでも中核をなすのが教育機能である。

正課体育は大学設置基準の大綱化の影響を強く受けた科目で、本学では開学以来一般学生に4単位必修を課してきたが、大綱化以降各教育組織は必修単位を2から4単位とした。この大綱化を前に、体育センターは正課体育を生涯学習社会にむけて生涯スポーツ教育を目指した方向へ舵を取った。生涯学習時代に向けて自ら学習できる能力を身に付けることや生涯を通じてスポーツを生活に生かしていく能力を育んでいくことが大学体育の役割となることをフォーラム等の開催を通して確認していた。

中期目標・中期計画

生涯スポーツ教育の方向で大学体育を進めているさ中に、今度は国立大学の法人化の波が押し寄せた。この波はなかなかその姿が思い描けず、現在に至ってようやくその輪郭が理解できるような有様というのが正直なところである。したがって3年度前に提出した中期目標・中期計画は暗中模索のなかで提出したものと思っている。

体育センター、学士課程(学群)教育の理念・目的及び教育の成果に関する目標については以下の項目を挙げた。

- 生き生きとした、活力に富む大学生の育成
- 豊かで、たくましいリーダーになれる大学生の育成
- 心豊かな文化と社会の継承・創造する大学生の育成
- 日本人・筑波大学生としてのアイデンティティを備えた大学生の育成

そして、具体的教育目標については、体育・スポーツ活動による主体性の獲得・健康体力づくり・社会力づくり・身体的教養づくり・行動力づくりを掲げている。そして、どちらかという学習目標に相当する具体的目標として

○健康・体力を自ら高められる知識と技能の習得

○生涯にわたってスポーツを楽しめるレジャー能力の習得

○スポーツメディア・リテラシーの習得

○現実社会でもリーダーになれるスポーツスピリットの習得

の項目を掲げた。

これらの教育理念や目標を達成すべくカリキュラム・デザインの基本方針を

○自分自身の体育・スポーツの目標・目的が計画できるカリキュラム

○目標達成の自己評価できるカリキュラムとした。そして、カリキュラムのアウトラインについての計画は必修単位の目標を4単位とし、スポーツ実技と講義で構成されるものとした。スポーツ実技はスポーツ系と健康体力づくり系からなり、講義はスポーツの意義や価値・身体文化・運動生理・スポーツコーチング的な視点から構成し、授業内容の充実と目標に対応した評価ができるようにシラバスや副読本の充実を努めることを計画した。

以上のような教育理念や教育目標、カリキュラム・デザインを構成して、中期目標・中期計画を提出したが、生涯スポーツを指向した方向に沿ったものとなつたのはいうまでもない。

正課体育

法人化後の正課体育もそれ以前とほぼ変わらず授業展開されている。2006年度でみると、およそ5500人を対象に定時コース11固定時間割に31科目の中から総計139コマの開設、自由科目については集中実技6科目、通年実技4科目、演習3科目、3・4年次生対象の必修の集中実技10科目の総計17科目（一部重複開設）、更に大学院体育3科目、加えて本センター教官を中心とした総合科目3科目（2006年度）を開設している。

授業評価と授業改善ミーティング

本センターでは法人化に先立つ2002年度から、正課体育に関する学生による授業評価を独自に実施し、授業改善に向けた取り組みをしている。そこで学生の授業評価を通して、中期目標・計画にいかにつまみ込んでいるのかをみていきたい。

最初に作成された2002年の調査表は、作成の段階で他大学のものや文献、また本センターの授業のねらい等を参考に、個々の授業に関わる質問項目20と授業の中に組み

込まれている受講生全体に対するプログラム（オリエンテーション、体力テスト等）に関わる質問項目4から構成された。評価は6段階法を採用し、どちらでもないという選択肢を排除した（評価3を-、4を+とした）。2002年から2005年度の有効回答率は多少の変化はあるが、およそ80%であり、学生の評価を十分に反映したものであるといっ
てよい。図は法人化前の2003年度から2005年度の3ヶ年について、授業に関わる各質問項目の結果を示したものである。

その結果、「総合的に判断して、私が受けた体育の授業に満足している」（授業満足度）の質問項目に対してこの3ヶ年で全学生平均が5.30前後の8.8割を越える評価を示している。2005年度の授業評価では5.30であり、評価4以上の肯定的な評価をした学生は95.6%と学生の満足度は非常に高い。その背景を学生側の授業に対する出席状況と熱意からみると、全体の平均で4.91とやはり8割を超える評価であり、90%を超える学生が評価4以上を示した。また母集団が異なるが、1・2年次生よりも3・4年次生のほうが高い出席状況や熱意を示し（1・2年次生4.89・4.83に対して3・4次生5.04・4.97）、しかも授業満足度も高くなっている（1・2年次生5.26・5.25に対して3・4次生5.35・5.48）。従って全学年にわたり受講学生が非常に意欲的に取り組んでいる様子が窺われ

る。教官に対しては「教官は授業に対して十分な知識と高度な専門性を備えていた」に対する評価が高い（全体で5.6）のは当然といえるが、専門性を生かした授業展開をしていることが高い評価を得ているものと思われる。それに加え、「教官の授業運営に熱意や工夫が感じられた」に対して5.42とこれまた高い評価をしていることから、高い専門性と熱意を持ち工夫を凝らした授業担当者であるという教師像が浮き彫りにされ、学ぶ側自身の意欲に対して高い評価をしたことに加え、教える側にも高い評価であったことが分かる。

本センターでは学生による授業評価にとどまらず、授業評価の上位者を内部公表すると同時に多項目にわたって高い評価を受けた教官や項目毎の評価の高かった教官を話題提供者とした授業改善（FD）ミーティングを実施している。多くの教官が出席し活発な質疑応答があり、FDの一翼を担っている。

学生による授業評価の結果を踏まえて、中期目標・中期計画を見直すと、正課体育はその理念的な教育目標である「生き生きとした、活力に富む大学生の育成」や「日本人・筑波大学生としてのアイデンティティを備えた大学生の育成」についてか

なり成果をあげているように感じる。すなわち、体育の授業に肯定的な評価をした95%以上の学生がいきいきと学生生活を送っていることを想像できるし、受講科目の教官がその専門性を駆使し、それぞれ専用の施設や用具を用いて展開し、またメッセージを送る授業が本学学生としてのアイデンティティー醸成に一役買っていることは自明のように思われる。加えて本センター教官が中心となった総合科目が学生の選んだ人気ナンバーワン授業となり、またIOC ロゲ会長が本学の名誉博士号を受賞する契機となった総合科目も本センターが中心となって開設したものであることは、学生にとって筑波大学ならではの授業であったものと思われる。

また母集団は異なるが、1・2年次生よりも3・4年次生が授業に対する出席状態や熱意が高くしかも授業満足度も高いことは(2005年度)全学4単位必修への足掛りを与えてくれるものでもある。

更に、第一希望選択科目を受講できないことが満足度を低くしているとも考えられることから、次年度受講時に優先的選択権を考慮するシステムを今年度から開始した。これは中期目標や中期計画に盛り込まれていないが、必要な改善であり、授業満足度の低いであろうと思われる5%弱のものに対する対策の1つとして期待できる。

以上のように、学生による授業評価から教育的側面についてチェック機能を働かせた場合に、教育の理念・目的に関する中期目標や計画はかなり達成されているように思える。具体的なものに関しては科目の多様性があり一概に判断しかねるが、受講科目を通して学生自身が体育・スポーツの目標・目的を計画し、自己評価できるカリキュラムが編成され達成されているかといった案件については今後も検討を要しよう。

学生による授業評価を中心にチェックすることは一面的で短絡的に過ぎるとの批評を受けそうであるが、本学が顧客志向の立場をとるのであればこの試みも許されよう。できることなら卒業生からの評価をもとにしたいが、今後その調査をする予定である。

終わりに

本学正課体育のコンセプトを「スポーツ力」を通して「人間力」を向上させることとし、『「スポーツ力」から「人間力」育成へ』としてまとめた。そして授業を通して身体力・社会力・コミュニケーション力・体験力の涵養をキーワードとして掲げるものとなった。これは中期目標・中期計画の具体的な教育目標をもとに練り直したものと捉えることができる。今後、正課体育の筑波スタンダード化の中核的理念になるものと思われるので、センター内での議論が活発

になることを期待したい。

2004年、中央教育審議会は21世紀が知識基盤社会の時代となることから、高等教育は個人の人格形成上も国家戦略上も極めて重要であることを答申した。本学の学士課程では広い視野、豊かな人間性及び確かな学力を備えた人材の養成を基本的な目標としている。IT革命が進む現在、学生が知の洪水の中にあり、バーチャルリアリティの世界に埋もれる可能性も高い。このような状況の中で学生をリアリティに引き戻し、知・心・身のバランスを取り、大学の知を生かすことに繋げ、しかも直接的に人格と触れ合うことができる正課体育は本学の基

本的な教育目標達成に大いに寄与できるものとする。そのためにも、本センターの中期目標・中期計画を不断に見直しつつ、それに沿った改善・改革を継続させ、構成員や組織の理想に接近する努力が今後も必要であろう。

(みやした けん/陸上競技コーチ論)

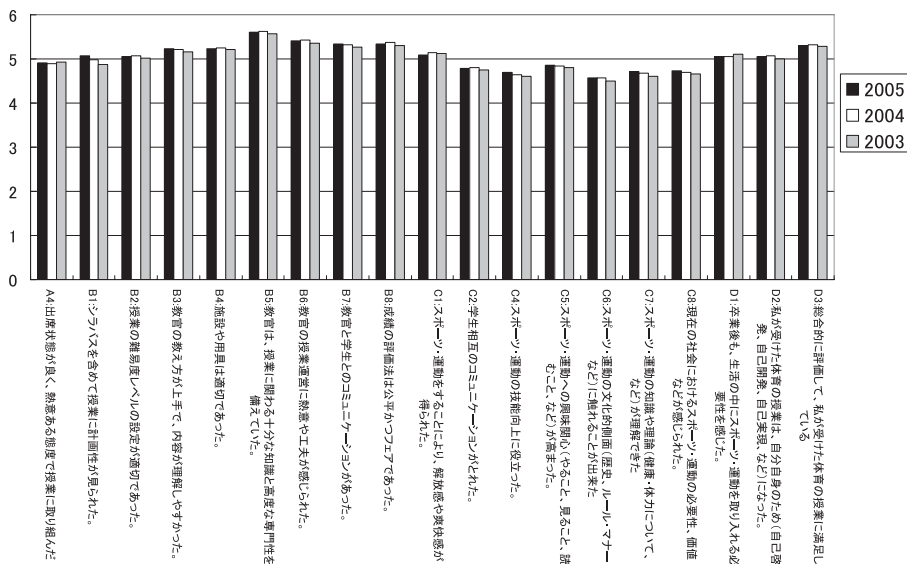


図 学生による正課体育の授業評価 (2003年から2005年)